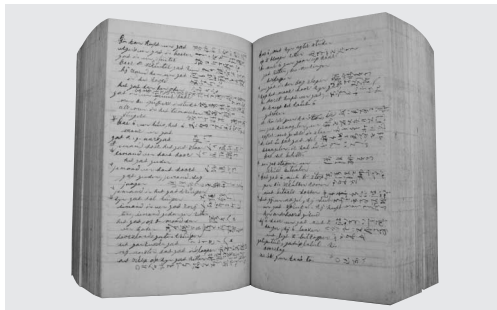


## ニッポナリアと対外交渉史料の魅力 (25)

や文化人類学の色彩が強いことから、我が国では『ジャワ史』ではなく、『ジャワ誌』と訳した書名が定着しています。また、地図をはじめ、統計や絵画などの折り込みの図版もあり、ペナン島勤務の際に行っていたマレー研究の知識と経験を生かし、約五年間にわたるジャワ島統治の傍ら進めていた地域研究の成果を見事に纏め上げています。

一方、ドゥーフがラッフルズの出島奪取事件の前に編纂を始めていた蘭日辞書は、事件を挟んで着々と進行しました。この辞書はフランソワ・ハルマという人物が編纂していた蘭仏辞書を基本にしたもので、1833(天保四)年の完成まで二十一年を要しました。

こうした中、1817(文化十四)年にドゥーフは帰国のために約十九年間も滞在した日本を離れ、その後の編纂事業は、彼に協力していた通詞たちが引き継いでこの仕事を成し遂げました。



『ドゥーフ・ハルマ』全十巻の内の一。天保四(1833)年。

(本学図書館は全巻を所蔵)

この蘭日辞典は、『ドゥーフ・ハルマ』や『長崎ハルマ』と呼ばれています。印行されることがなかったことから、浩瀚なものであるにも拘わらず書写を以て普及して、幕末までの蘭学研究のために必携とされる大辞典になったのです。

このように、二人の赴任地での研究分野は異なりましたが、ラッフルズの研究業績は欧米でジャワや東南アジアを知らしめる大きな役割を果たし、ドゥーフの辞書編纂事業は日本国内の蘭学研究を促進し、その結果、江戸時代末期にかけての技術や産業の振興に大いに貢献しました。

### ■その後の二人、そして日本は

ラッフルズは帰国後、ロンドンで『ジャワ誌』を刊行すると再びアジアへ赴きます。1819(文政二)年にはシンガポールでジョホール国王を奉じて植民地経営を始めました。ジャワ島や出

島のことを意に介することはなかったようですが、卓越した政治・行政面での手腕は衰えておらず、約四年間にわたって滞在する間に、商館建設、奴隷売買の禁止、教育の改善、貿易の振興、さらには、この地の自由港化などを次々と実現してシンガポール発展の基盤を築きました。<sup>(2)</sup>

一方のドゥーフは、ジャワからオランダへ戻る途中、乗船が暴風雨に遭遇しました。アメリカ船に救われたものの、愛妻と日本での収集品を失いました。しかし、帰国後の1833(天保四)年にハーレムで“Herinneringen uit Japan”(『日本回想録』)を刊行し、その冒頭で「イギリス人はもっとも卑劣なやり方で、この旗(オランダ国旗)を出島から消滅させようと、二度も試みた」とラッフルズを批判しています。

二人は知力を尽くして争いましたが、事件が推移する中で書簡を交わしていました。文面では共に敬意を払いながらも、其々の立場を強力に、反面、柔軟性をもって主張合っています。また、交渉は終始人を介しながら進めたものでしたが、その過程で互いに相手の人物の高い知性と優れた判断力を認識し合ったと考えられます。面識はなかったものの、いわば「好敵手」の関係だったのではないのでしょうか。

この事件を経た1825年(文政八)年に、幕府は異国船打払令を出して頻繁に出没するようになった外国船を取り締まろうとします。しかし、これは完璧な政策とはいえず、1853(嘉永六)年のペリー来航によって遂に日本は開国することになるのです。それは、ラッフルズの出島奪取未遂事件から数えて、丁度四十年目の出来事でした。

#### 基本的な参考文献

○信夫清三郎著『ラッフルズ伝』平凡社(東洋文庫 123)1968年。

○永積洋子訳『ドゥーフ 日本回想録』(新異国叢書 第III輯 10)雄松堂出版 2003年。

註

(1)永積洋子訳『ドゥーフ 日本回想録』(新異国叢書 第III輯 10)雄松堂出版 2003年153-155頁。本書の「解説」で訳者も指摘するように、ドゥーフと五人の通詞たちの間に極めて厚い信頼関係を見出すことができる。

(2)わが国でラッフルズは出島の事件があったにも拘わらず、知名度は低い。しかし、刊行物には参考文献に掲げたもののほか、イギリスのナイジェル・パーリーが著した伝記で柴田裕之が翻訳した『スタンフォード・ラッフルズ シンガポールを創った男』(凱風社、1999年)や、村上龍の小説『ラッフルズホテル』(集英社、1989年)などがある。

おく まさよし(司書・図書館事務長兼管理運営課長)